
俺達が狂った夏休みから

くぎゅりん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺達が狂った夏休みから

【Nコード】

N0899X

【作者名】

くぎゅりん

【あらすじ】

俺、広瀬佑樹はごく普通の高校一年生だった。

しかし高校生活始めての夏休みに俺、いや、俺達の日常は狂い始める。

俺の過去

幼馴染みの秘密

親友の恋の行方

俺自身の恋の行方

そんなことが複雑に絡み合い崩れ去る

儂くも切ない学園ラブコメディー

俺達の狂った夏休みから／登場人物紹介（前書き）

登場人物紹介です

俺達の狂った夏休みから／登場人物紹介

広瀬 佑樹 （ひろせ ゆうき）

このお話の主人公

過去に大きなトラウマを抱えていて、思い出すと重度の発作に襲われる

特に好きな物も無く、これと言った特技も無い

成績も、中の上と良くも悪くもない

そんな、どこにでもいる高校一年生

一人称は俺

滝本 健太 （たきもと けんた）

このお話のもう一人の主人公

佐藤きなこ を心の底から大好きで、その愛はたまにいきすぎている
特技は運動、体を動かすことが大好き

身長はかなり高く身体は筋肉質でガツシリしている

しかし、性格は子供そのもの

頭はかなり悪く一学期末の時点で進級が危ぶまれている

友達との友情を大切に思っていて喧嘩があればとめにはいる

一人称はオレ

積風かなで （つみかぜ かなで）

平均よりも低い身長に、ほぼ皆無な胸板

赤みのかかった色の髪はバランス良くツインテールにまとめてめられている

容姿も高校一年生には見えない程幼く、中学生に間違えられてしま
う：佑樹と健太とは幼馴染みできなこ、とは親友

かなりの天然さんで、幼馴染みの、佑樹や健太でも考えている事が
わからない

優しく、誰からも愛される一人称は、わたし

佐藤 きなこ (さとう きなこ)

名前はかなり甘そうだが本人はちょっぴり厳しいクラス会長さん
実はツンデレ？と言う噂が流れているが誰もデレを見たことがなく、
クラス七不思議の一つにされている

スタイルがかなり良いので良く大学生に間違われる

健太は『ぼんきゅっぼん』と表している

腰ほどまである長い黒髪は見るもの全てを虜にしてしまう
実際に高校内では、きなこに見とれて怪我をした、という人間は後
を絶たない

容姿もかなり整っていて、まるでモデルのようだ

佑樹達とは春休みに出会い気が付けば今のような関係に
一人称はあたし

俺達の狂った夏休みから／登場人物紹介（後書き）

登場人物紹介です

お話が進むにつれ更新します

狂った学園ラブコメ（前書き）

始めて自分の頭の中のお話をこう言う形で書いてみました。

自分自身ラブコメとかが好きなので尊敬する先生方に近付けるように頑張ります暖かく見守って下さい

狂った学園ラブコメ

隣いつもには愛しい人がいて

やつとお互いの気持ちに素直になれて

お互いに愛し合っているのが当たり前で

誰にも渡したくなくて

誰にも奪われたくなくて

そんな幸せを今の俺は持っていて

人生の絶頂期だな：

「もーおにーちゃん！話聞いてる！？」

「…あつすまない、ボーッとしてた」

そんなことを考えている俺の顔を除きこみながら向日葵が頬を膨らませて起こったような顔をする

「もーおにーちゃんてば、何考えてかのかは分かんないけど浮気は許さないよ！」

「そんなことはしない！！俺には向日葵しか見えてないからな！！」

「なっとなな何いってんの！こんな人前で…恥ずかしいよ…」
「かーっと顔を真っ赤にしてもじもじしながら恥ずかしがる向日葵、可愛すぎる。少しからかってやろう。」

「お前は浮気してないだろうな！？」

「してないよ！！だって…わっわたしにもお兄ちゃんしか…見えて…ない…から…」

どんだんうつむきながら声が小さくなっていく。可愛すぎるな。…不味い理性が！

「っ！？」

気がつくくと向日葵を抱き締めていた。

「っ…痛いよ…」

顔を真っ赤にしながら俺の背に手を回す向日葵

「すっすまない！」

慌てて離れようとする向日葵が抱きついてきた

「痛いよ…痛いけど…お兄ちゃんなら良いよ…」俺の胸に顔を押し当ててくる

暖かい向日葵の体温

伝わってくる早い鼓動

それにつられるように早くなる俺の鼓動

向日葵の全てが欲しくなる小さな顔も

細い身体も

自分の色に染めたいと思ってしまう

汚したいと考えてしまう

奪いたいと叫びたくなる

しかしこんな汚れた感情を向日葵には知られたくない。

知られると向日葵が俺を嫌いになる気がして

遠くにいつてしまう気がして

だから俺はこの言葉を向日葵に伝えるのが精一杯だった

「向日葵…愛している」

俺の心からの本当の気持ちだった。俺達は兄と妹、こんな感情を持つてはいけないのかもしれない。

でも俺は向日葵を愛している。それは兄妹として、家族としての愛の延長に過ぎないのかもしれない。

だが、たとえそうだとしても、俺は向日葵を愛している。その事実揺るがない。

向日葵もきつと…

だが

向日葵は俺に返事をしないまま逝った。

まだ涼しい初夏の出来事だった。

「あっちいあっちいあっちいよー…」

「だらだらすんな、お前がちゃんと勉強して赤点なんてとらなけりゃこんなことにならなかったのに」

今俺は幼馴染みの健太の居残り補習に付き合っている。

健太は一学期の期末試験で見事ストレートに全教科赤点を叩き出した。

当然先生方はお怒りだ。

そこで俺に白羽の矢が立てられた。

健太の幼馴染みでなおかつ成績は悪くはない、まあ良くもないんだがとりあえず健太よりは全然良い

で先生方は俺に言いました『広瀬あの馬鹿の勉強を見てやってくれ、幼馴染みのお前ならあいつも話を聞くだろうし、なにしろあいつは私達教師の話しなんか耳も傾けないからな…』
俺もそのくらいならと引き受けました

『良いですよ』

するとあのハゲ教師は言いました

『じゃああいつが補習に合格するまで広瀬と滝本は夏休みも学校に来てもらおうからな』

ハイ頭おかしいですね

『なんで俺まで！？健太だけで充分でしょ！？』

『いやいやいや、あいつの飼育係であるお前にも責任があるだろう、それが嫌なら頑張って滝本を一発合格させるんだ、一回目は終業式が終わったあと教室で行うからな。ちゃんと滝本にも言うておけよ』
そう言うってハゲは立ち去りました。

で今に至る

「あゝ！マジあのハゲふざけんなよ！学年主任だからって！既に職権乱用の域だよ！」

熱いし帰りたいしで俺のイライラさ結構溜まってきた

「まあまあ、そうカッコすんなよ」

「お前が言うなっ」

ぺしっとノートで頭を叩いてやる

「いてっ」

と健太が顔をしかめると同時に教室のドアが開かれた「たっだいま
ジュース買ってきたよ」

そう言って教室に入ってきたのは積風かなで、健太と同じく俺の幼
馴染みだ

「健太、しっかりやってる？」

こっちは佐藤きなこ、名前的には甘そうな人だがちよっぴり厳しい
我らがクラス会長様だ

「会長さーん！寂しかったよー！」

佐藤を見つけたとたんにシャーペンを投げ捨て走り出す健太
抱きつこうとしているのか手を大きく広げ佐藤へ真っ直ぐ突っ込ん
でいく

すると佐藤も手を広げる！？マジか！？完璧に健太を受け入れる体
制に入っている佐藤、それを見て喜びを身体全体で表しながら健太
は佐藤のもとへ飛び込んだ

佐藤はそんな健太を受け入れたのか抱き締める

「かつ会長！？」

「佐藤！？何やってんだ！？」驚きを隠しきれない俺とかなで…
しかし、それもそのはずなのだ

健太は分かりやすいくらいに佐藤のことが好きだ

そのことに佐藤自身も気付いている

だが佐藤は健太をあっさり拒絶する

例えば席替えて健太と隣になれば先生に

『私目悪いんで席前がいいです』

とか言う程だ

そのときの健太のへこみっぷりといったら…

とりあえずこんな佐藤が健太をあっさり受け入れるわけがないのだ

ましてや抱き締めるなんて…

暑さでやられたか？

「せりゃあああああ！！」

「へぶっ！？」

しかし佐藤は正常だったようだ

健太を抱き締めたまま体をブリッジの様に勢い良く後ろにそらす
綺麗なジャーマンだ

一般的にジャーマンは相手を後ろから掴み叩きつけるが佐藤は健太の飛び込んできたスピードに自分のパワーを上乗せして技を繰り出した

健太へのダメージは肉体的にも精神的にも大きいはずだ

「よっ」

ブリッジから軽いみのこなしで体制を戻した佐藤は自分の後ろで地面に突っ伏している健太を見つめている
やり過ぎたと反省しているのだろうか

「ふふっ…」

「「！？」」

笑った！？

俺とかなでは同時に同じことで驚愕する
なんで笑ってられんの！？

健太動かないよ！？

あっ動いてた。指先が痙攣してる

ってそれヤバくね！？

ドクドクと流れてくる赤い液体

「ゆーき！わたし怖いよ！！健太の血も怖いけど会長さんが今一番
こわいよ！！」

「ああ、かなで同感だ。俺も今佐藤が一番怖い」

「ほらそこ2人イチャコラ抱き合っていないで雑巾とバケツ待って
きて」

なんだこの人！？健太の心配より血で汚れることが心配なのか！？

「いやまて！さすがに健太をこのまま放置は危険過ぎないか！？」

「それもそうね、あたしが殺ったってばれちゃ不味いし」

えっそっち！？健太の命が危険じゃない！？しかもこの人絶対『やった』じゃなくて『殺った』

って言ったよね！？

「多分ゆーきは健太の命が危険って事を言いたかったんだよ！？」

驚きで固まっていた俺の代わりに、かなでが伝えてくれた

しかしかなでの声はかなり震えている

「そっか、じゃあ広瀬くん。この馬鹿を保健室に運んであげて」

「はいっ！！」

思わず声がうらがえった

しかし保健室よりも救急車じゃないか？

でも佐藤に逆らえば：

考えただけで恐ろしい

「かなでちゃん血の始末をあたしと手伝って」

「ひゃいっ！！」かなでもうらがえった

しかし不謹慎ながら今の返事はちよつと可愛かった

健太を保健室に届けると後始末は終わっていてさっきあったことが
まるで嘘だったかのようだった

「佐藤：実はお前何回か殺めちゃったことあるだろ…」

「いやまだ無いよ」

まだ無いって！？

これからあるかもなのか！？このあと2人と別れて健太の代わりに
補習のプリントをハゲに渡しに行った

何故滝本じゃないのか？と聞かれたがトイレ行ってますと適当に誤

魔化しておいた見事補習は合格点で俺達は無事夏休みを迎えた
でもこれが俺達の日常だった

しかし俺達の日常は夏休みに入り大きく変わることになる
失い別れてまた出逢う

このお話は俺達の狂った夏休みから始まる

狂った学園ラブコメ（後書き）

自分としては頑張った気がします（つゝ、＼、）つ
でもやっぱり文章の構成とかお話のテンポとかクオリティーはまだ
まだだと思っています。

感想やアドバイスよろしくお願いいたします。

俺達の狂った夏休みから／0（前書き）

更新遅くなりました
頑張っ て自分なりに一番良い、文章にしようと思いましたが…
やっぱり難しいです

俺達の狂った夏休みから／0

人と触れ合うことが恐い

また失ってしまう気がするから

もう家からは出ない

誰にも会わなければ誰も死なないから

生きていることが辛い

あいつを思い出してしまおうから

……そうか死ねば良いんだ俺が居なくなれば誰も失わない

俺もあいつを思い出して苦しまなくていい

寧ろ死ねば、あいつに逢えるかもしれない

死ぬか……

俺はふらついた足取りで階段を一段ずつ上がっていく「静かだな……」

いつももなら騒がしい学校も夏休みになると不気味な程静かだ
聞こえるのは俺の荒い息づかいだけだ

今から俺は死ぬ

でも俺の頭の中はスッキリしていた

ごちゃごちゃした世の中から解放される

こんな嬉しいことはない

失う物も何もない

あいつが逝ってから1年

たくさんさんの柵に囲まれ続けた

でもやっと、その柵から解放される

そう思うと足に自然と力が入った

屋上まで一気に残りの階段をかけあがる
やっど、やっど、やっど！しかし、

「何でお前が…？」

俺の目の前には最後まで邪魔するやつがいた

「それはこっちの台詞だ」滝本健太、幼馴染み、親友「こんなところで何する気だ」

健太が何時もは出さない冷たい声で聞いてくる

「…ちよっとした野暮用だ、早く補修に戻れよ、先生多分怒ってるぜ？」

声は自分でも分かるくらいに震えている

でも俺は出来る限り普通の態度を装ってその質問に返事をする
しかし、健太は動かない

「今日の補修は終わった、それよりどんな用事だ？言ってみろ」

「お前何か変だぞ？なんでそんなキレてんだ？」

「話をそらすな、質問に答えろよ」

チッ

なんだコイツ

俺が死のうとしてるのに気付いてんのか？

「じゃあ健太はどんな用事だと思う？」

「！…それは…」

予想道理だ

コイツは気付いている

しかしどうやって…？

まあ今はそんな事はどうだって良い

気付いているなら話しは早い

「自殺すんだよ、俺自殺すんだよ！」

ばれているんなら力ずくでどかすしかない

「どけ！！」

俺は力強く健太を横にどかす、いや、どかそうとした

しかし、健太は自ら道を開けた

「なっ!」

俺の手は虚しく空を切る

「…逝けよ、今のお前なら死んでもいいや」

健太は本当にどうでも良さに鼻をほじっている

「っ!」

思わず俺の足が止まる

シヨックなのか自分でも分からないが、次の一步を踏み出せない

「早く逝けよ!なんだ!?!今更怖じ氣ついたか!?!ははw笑えるw何時まで止まってんだ!?!早く逝けよ!」

健太はそう言って俺の背中を蹴りつける

前に倒れかかった俺は、必死に屋上の入口を開け屋上へ出る

最後までなんか俺、格好悪いな、

こうして俺、『広瀬佑樹』は中学三年の夏休みに『死んだ』

俺達の狂った夏休みから／＼0（後書き）

このお話は第一話のちょうど一年前のお話です

続きを書く前にとりあえず佑樹の過去を少しだけ書いておかないと、後々のお話がスムーズに進まないので第二話より先に投稿しました。ちよくちよくこんな感じでそれぞれの過去編を入れていきたいと思っています。自分的には、このお話は過去との絡みが重要なので過去は通常のお話より力を入れていきます。

また感想ありがとうございました

アドバースなどもしていただきたいです。

それではノシ

次は早く更新したい：

俺達の狂った夏休みから／2（前書き）

早く更新できました。

いやしかし、上手く文章が作れない…

俺達の狂った夏休みから／2

暗い路地裏、沢山の怒声や罵声を浴びせられながら、オレはそこを駆け抜ける

止まったらそこでおしまい

全てが水の泡だ

だからオレは走るのを止めない

軋む足を無理矢理動かした

喉からは血のような味がする

でもオレは走り続けた

たった一人の『親友』のために

理由はそれだけ

あいつはいつも人の為に動くとする

オレが言っちゃダメだと思うけど、バカなくらいに

たまには『親友』に相談してくれよ

話しならいくらでも聞くし力にもなるからさ

こんな状態だというのにオレは笑っていた

休むこと無く照りつける太陽

そんな中、俺は家から5分の距離にあるコンビニに向かっている

理由は簡単だ、暑いから

こんな日はアイスでも無いとやっていけない

しかし世界はそんなに甘くない

かんかんかん

踏切だ：

「こんな時に限って…」

俺は垂れ流れる汗を手で拭いながら独りで呟く
誰にも言う訳でも無かったが虚しさが広がった

「しかし長いな…」

また独り言を言ってしまった：

しかし、それは独り言にならなかった

「ですね、凄く長い」

「うおっ!？」

てっきり一人だと思っていたのに、いつのまにか隣にはランドセルを担いだ小さな女の娘がいた

「なんでこんなに長いのでしょうか？」

ランドセルの少女が可愛らしく首を傾げる

しかし本当に可愛い

ハーフなのだろうか

肩までしかない短い髪は、綺麗な栗色でしっかり手入れが行き届いているように見える

くりくりとした大きな目はどこことなく不思議な輝きを放っていて、見ていると吸いこまれるような錯覚に陥る

鼻は高いわけではなく：

「どうしましたか？私の顔に何かついているのでしょうか？」

ランドセルの少女は自分の顔をぺちぺちと触りながらまた首を傾げる

「い、いや、可愛いな」と思っている

まずい、思わず本音が出てしまった

咄嗟に言い訳を探すが見つからない

このままだと俺は出会って2分もたない幼女を、いきなりナンパした変態さんになってしまう

焦って言い訳を探す俺にランドセル少女がトドメを刺す

「がっかりです、お兄さん、変態さんなんですネ？」 「なっ!？失

礼な！お兄さんは断じて変態さんじゃないぞ！！」

「出会ってから3分とたたない幼女をナンパする人、を変態さん以外に、なんと呼べばいいのでしょうか？」

また可愛いらしく首を傾げる

可愛い表情としぐさだが言うことは鬼のようだ「じゃあ、そうですね。私に好きな人を教えてくれれば、変態さんじゃないって認めてあげますよ」

何をこの幼女は言っているんだ！？

話し方や雰囲気少し大人びている、とは思っていたがまさかここまでだとは：

大人の女性が男を口説くような事をサラッと言ってやがる！！

どんな家庭で育ったんだ！？それとも最近の小学生は、皆こんな感じなのだろうか！？

まあ、今はそんな事よりこの場をどうやって切り抜けるか、だ

無視するのが一番良いのだが、それは何か負けた気がする
じゃあ言うのか？

それも違う、今の俺に恋愛感情で『好き』な人間はいない、

いや、きつとこれからもそんな人間は現れないだろう俺にも昔、好きな人がいて本気でそいつを愛して

今は失い後悔している

だから、俺は二度と人を愛さない

「今、好きな人はいないかな…」

曖昧な返事しか出来なかった

こんな小さな小学生に

そんな自分が少し恥ずかしかった

「ふふっ…そーなんだ、ならよかった、『お兄ちゃん』」

「っ！？」

俺は思わず言葉につまってしまった

なんで、なんで今あいつの事を思い出したのだろうか
この少女が何処と無くあいつに似ているから

いや、違う、と思う

この少女の笑い声があいつに似ているから？

いや、違う、と思う

じゃあ何故？

「ハアハアハア…」呼吸がうまくできなくなる

全身の毛穴が開き嫌な汗がながれる

胸が張り裂けるように痛いなんて、なんで、なんで

頭の中で蘇ってくる光景に悪寒がはしる

やめろ！くるな！！止まってくれ！！

しかし、願いは叶わない

あいつは死んだ

俺の目の前で

「うっ…」

吐き気が込み上げてくる

もう駄目かもしれない…

「大丈夫！？大丈夫！？ちっ、『ちょっとやり過ぎたか…』」

俺は意識が遠退くなか、少女がそう呟いたのを聞いた

俺達の狂った夏休みから／2（後書き）

たのしんで頂けましたでしょうか？

自分的には続きが気になってくれればうれしいです。文章が上手く作れません：

悪い点をびしびし挙げてアドバイスしてください。お願いいたします感想で励ましてくれても、うれしいです。

次回も早く更新したいな：

俺達の狂った夏休みから／3（前書き）

中々早く更新出来ましたが…

俺達の狂った夏休みから／3

『あたしって、もしかしてストーカーなのかな…？』

ふとそんな不安が頭をよぎる事がある

あの人の事は何も知らない

知らないけど好きになったようするに一目惚れだ

あの『健太』と呼ばれている少年はいつも、いつも幸せそうに笑っている

そんな『健太』君をあたしは、遠くから眺めるしかない

あ、『健太』君が笑った

ふふっ あたしもちよつとうれしいな

すぐ隣であの笑顔を見ていたい

お話しをしてみたい

触れ合いたい

だから、あたしは今日も『健太』君を見ている

こうすれば、いずれ逢える気がするから

こんなあたしは、やっぱりストーカーなのだろうか…？

「起きてくださーい、おーい」

俺はそんな声を聞いて目をさました

目の前には俺の上に馬乗りをしている小学生

「おはようございます、どこか痛むところはありますか？」

今一状況が読み込めない…

俺何してたっけ…？

そんな俺の表情を読み取ったのか馬乗り小学生は教えてくれた

「私とお話をしてたら突然あなたが倒れたんですよ、それは、それは私もすっごくびっくりしました」

思い出した！！

そういえばそうだ！！

…しかし、何故、俺は倒れたのだろうか…？

記憶は霧がかかったようにぼんやりしていて、上手く思い出せない
「どうやって俺の家まで？」

「踏切の向かいの叔母さんが手伝ってくれました、凄く心配されましたよ？」「わかった、ありがとな」「いえいえ、当然の事をしたままですよ」

馬乗り小学生は俺に可愛らしく首を傾げ、にこつ と笑った

その笑顔に吊られるように、思わず俺も笑ってしまう良くわからないが凄く幸せな気持ちだ。

この馬乗り小学生と一緒にいると不思議な安心感がある。

まるで妹と一緒にいるような…

「それより、どこか痛むところはありますか？」

馬乗り小学生が心配そうに聞いてきた

俺は自分の身体を異常がないか、確認してみる

さっきまで少しボンヤリしてた頭の中は今ではスッキリしている
軽く肩を回してる

身体にも特に異常は無さそうだ

「いや、大丈夫だ」

「そうですか、なら…よかった…」

馬乗り小学生は本当に嬉しそうに、しかし恥ずかしそうに下を向き、
そう呟いた

その姿を見ていると、胸の中で何かが小さくうずいた

「向日葵…」

俺は無意識な内に呟いていた

俺の呟きに弾かれたように今まで下を向いていた馬乗り小学生が顔をあげた

その表情は

哀しそうな

嬉しそうな

泣き出しそうな

そんな表情だった

「っ…」

俺の胸のうずきがさらに大きくなる

うずきから傷みに変わる

「『お兄ちゃんっ…』」

馬乗り小学生が何か言った

しかし、俺には聞き取れない

その声はとても小さく、そして弱々しく震えていたから

「――――」

俺は声をかけようとした

しかし、俺の声は喉の奥でとまり言葉にならなかった

「おじゃましました…」

哀しそうにそう言うのと馬乗り小学生は、俺の上から立ち上がり玄関へ向かって歩いて行く

「――――！」

『待ってくれ!』

俺の声はまた喉につつかえ言葉ならない

身体も鉛のように重たくなり、全く動かない

意識も段々と朦朧としてくる駄目だ

堕ちる

そう思った直後、俺の意識は途絶えた

俺達の狂った夏休みから／3（後書き）

やっぱり思ったようなテンポにならなかったり自分でも意味のわからない文章になってしまいました…
できればアドバイスを…

俺達の狂った夏休みから／4－『始まり』－（前書き）

なんと言うか短いですね…たのしんで頂ければうれしいです

俺達の狂った夏休みから／4－『始まり』－

わたしには幼馴染みがいる

小さい頃から時間を共にしてきた

でも……

彼はわたしに振り向いてはくれなかった

彼が選んだのはわたしでは無く、彼の実の妹

仕方がない

幼馴染みと兄妹なら、兄妹のほうが共に過ごす時間は長い

年頃の男女が誰にも頼らず、たった二人だけで生きてきたのだ

それなら愛が芽生えたって仕方がない

例えそれが実の兄妹であっても

しかも、今は二人の間を邪魔する者は居ない

間違いが起きても正してくれる親が居ないからだ

しかし、わたしは二人が間違っているとは思わない

本当に愛し合っているなら

歳も

距離も

時間も

性別も

次元も

関係も

『関係無い』

『愛し合ってさえいれば』だからわたしは二人の愛を『試した』
結果二人の愛は『本当だった』

一日の間に二度も意識が飛ぶという稀体験をした俺は、まだ多少ボンヤリとしている頭をフル回転させ何故気絶したのかを探りはじめる
まずアイスを買に行く途中で意識が飛んだ
それはわかつている

しかし、何故気絶したのかが思い出せない

二度目も同じだ

誰かに起こされた

しかし何故か気絶した

誰に起こされ何故気絶したのか思い出せない

「思い出せないんじゃないよな」

俺は無駄な考え事を早々と切り上げて夕飯の準備に取りかかるため、キッチンに向かった

そこで、冷蔵庫を開けた俺は途方にくれる

「そーいや今日コンビニ行っただけじゃないじゃん…」

空っぽの冷蔵庫の可動音だけが虚しくなり響く

「買いに行くか…」

時刻は午後6時

俺は家から5分の距離にあるコンビニへ向かうために家をでた

今思えばあの時家から出なければと思う

俺の日常は完全に今日から狂い始めていた

俺達の狂った夏休みから／4－『始まり』－（後書き）

短いです

凄く短いすね

実は執筆中に書いた文章を間違って全消去してしまいました…orz
消去前は自分的に今まで、で一番良い感じに書けていたのですが…
まあ今更悔やんでも仕方ない！！

前向きに生きようー！

次からやっとな『本編』って感じですよ

たのしんで頂ければと思います

あとアドバイスもよろしくお願いいたします

感想で励ましてくれてもうれしいです

狂い始めた日常（前書き）

早く更新できました

結構頑張りました！

楽しんで頂ければ嬉しいです

狂い始めた日常

時刻は午後6時

俺は家から5分の距離にあるコンビニに来ていた
適当に弁当を選びレジに並ぶ

それほど時間もかからず俺の順番に

愛想の無い定員が作業的に仕事をこなしていく

「ありがとうございました」

コンビニを出てふと気がついた

さっきまで傾きかけていた夕陽は完全に沈み、あたりを支配しているのは夜の闇だけ

あれ？俺そんなに長く買い物してたっけ？

携帯を開いて時間を確認してみる

6時15分……

たった15分しか経っていない……

なのに何故辺りはこんな真っ暗に！？

空を見上げると星すら見えない

確かめようの無い恐怖が俺を襲う

恐くなった俺はコンビニに戻ろうと後ろを振り返る
が

「嘘……だろ……」そこにはコンビニなど元から無かったように、
ただ闇が広がっているだけ

恐怖が大きな波となって俺に押し寄せて来た

辺りを見渡しても見えるのは完全な闇だけ

上を見上げも真っ暗な闇

下を見据えても真っ暗な闇

『ふふふっふふふっ』

とそんな闇の中、女の子の笑い声が聴こえた
一人じゃない!!

そんな安心感が込み上げてくる

「おい!! 誰かいるのか!」

俺は咄嗟にそう叫んでいた

確かに声は聴こえた

が、しっかりと確かめておきたかった

自分の聴いた声は空耳では無く人の声だと

早くこの孤独の闇から解放されたかったから

『誰も居ないよ、ここには誰も居ないよ、ふふふっ』こんなに自分は必死なのに帰ってきた返答はふざけたものだった

「ふざけんな!! いるんじゃないか!!」

思わずカッとして怒鳴ってしまった

相手の姿が見える訳でもないのに……

『ふざけてないわよ、本当にあなた以外は誰も居ないのだから』

今度はどこか諭すような声色だ

誰も居ないはずは無い

確かに今聴こえた声は俺の言葉に返事をしているのだから

「お前が居るじゃねえか!？」

『……僕? 僕は居るよ、当たり前じゃん』

何なんだこの声は……

『僕は居るよ、けど、君の求めている、【誰か】には当てはまらないよ』

少女の声は更に続ける

『君の求めている【誰か】って【人間】のことでしょ? 生憎、僕は【人間】じゃないんだよ、寧ろ【人間】は僕を恐れるんだ、現に君

も僕を恐れている、あつ！でも君は一度僕を求めた事があつたね！
！たまに居るんだよ、君みたいな変わり物が』
何を言っているんだ？

頭がおかしい奴なのか？

しかも俺が一度、この少女の声を求めた事がある？
ますます訳が解らない

「じゃあ、お前は何なんだ？人間じゃないんなら動物か？」

『ぶつぶー残念、はずれ』

「じゃあ幽霊か？」

『うーん……ちよつと違うな、でも半分正解だよ！半分は、はずれだけどね、霊的存在、て言うのは合ってるよ、でも幽霊とは違う、そうだねーしいていうなら、君たち【人間】は僕たちを【神様】って呼ぶよ？だから答えは 【神様】 かな』えっ？

「すまない、もう一度言ってくれ」

『正解は【神様】だよ』

……！！？

神様！？

ってそんなわけないか……

「神様なら一目姿が見てみたいぜ」

俺は嘲るように笑った

『ふーん、良いよ。見せてあげるよ』

自称神様は甘い、誘うような声でそう言った

相変わらず辺りを支配しているのは終わりの見えない闇だけ

しかし、俺は自分の視線の先にボンヤリとした灯りが有るのに気が付いた

さっきまでは無かった

と言うことは……

俺の心臓が大きな音をたて始める

自分でも気付かないうちに身体が震えている

それは極度の緊張からくる物なのか、それとも恐怖からくる物なのか、今の俺には解らない

もしかすると今俺は凄い者に会うんじゃないのか!?

さっきまでは混乱していてあんなことを言ってしまったけど、もし本当に神様だったら……

冷たい冷や汗が、俺の背中を流れる

俺、すっげえー罰当たりなことしてるじゃん……

「ん？今更気付いたんだね」

「っ!？」

その声はさっきまでとは違い俺の真後ろから聴こえた
いつの間にか目の前にあった灯りは見えなくなっている

「君、凄く罰当たりなことしてたんだよ？」

全てを見下すような

全てを壊すような

そんな冷たい声が俺の耳元で聴こえた

本能で悟った

こいつは普通の人間が関わっては絶対にいけない

「ホントに色々気付くのが遅すぎるんだよ」

首筋に氷のように冷たい何かを押し付けられる

視界の端に映るそれは光の無い、この闇の中でも鈍く輝いていた
鎌

それもかなり大きな

刃渡りだけで俺の伸長は軽く越えている

「やあこんにちわ、【広瀬佑樹】、僕は君に教えた通り【神様】だ、
でも中でも僕はこう呼ばれている【死神】ってね。誰が考えたか解
らないけど酷い名前だよね、【人間】を【死】に誘う【神様】。
だから【死神】、そのまんまじゃん？」

【死神】はさらに続ける

「まあこの名前も【嫌い】じゃないんだよね」

そう言う【死神】は鎌をゆっくりと後ろにひく
「えっ？」

皮膚が裂け、中から紅い血が溢れだす

しかし痛みは感じない

血の生暖かい感覚が俺の首を滴り、流れる

【死神】は更に鎌をひく

次は深く首が挟られる

「あぐっ!？」

痛い!! 痛い!! 痛い!!

噴水のように首から血が噴き出す

紅いそして黒い噴水は、俺の服や身体中を紅黒く染め上げる

「あああ……」

何か言おうとしても情けない声がただ喉から漏れただけ

「ふふふっ 【広瀬佑樹】？ 君の寿命は、7月29日午後6時24分
25秒に【終わったよ】？ 今までお疲れ様」

狂い始めた日常（後書き）

早く更新できました

この回が自分の中では本当の第一話って感じですよ。

続きが気になって貰えれば嬉しいです

あと

アドバイス等お願いします

感想で励ましてくれても嬉しいです

狂い始めた日常／2（前書き）

狂い始めた日常／2

と言う題名ですが時系列的には

狂い始めた日常／1

のちよつと前って感じですよ

楽しんで頂ければうれしいです（＊▽

狂い始めた日常／2

『お兄ちゃん、大好き!』

これが私の小さい頃の口癖だった

今ではこんなこと恥ずかしくて、絶対に言えない……

何でこんなこと言ってたんだろ……?

やっぱり小さいから、まだ子供だったから、かな……?

今の私だってお兄ちゃんの事大好きなのに!!

寧ろ小さい時よりも大好きなのに!!

なのに!:

でも言えないよ……

伝えられないよ……

私達は兄妹

これ以上の関係を求めちゃいけない

一緒に暮らせているだけで満足しなくちゃいけない

だけど:

無理

そんな事絶対に無理

満足なんて出来ない!!

だって私はお兄ちゃんが好きだから

家族愛、とかじゃない

異性として、男性としてお兄ちゃんを愛してる!!

でも——ちゃんもお兄ちゃんの事が好きだ

お兄ちゃんも——ちゃんにもし告白されたら、OKするのかな……

——ちゃん可愛いし……

もしかしたら……

そうだとしたら……

私——ちゃんのことを……

朝起きて、まず顔を洗う

次はトイレ

次に朝食を済ませて歯磨き

で最後に【佐藤きなこ】様への礼拝

これがオレの日常だ

「会長さん、会長さん、貴女は世界で一番御美しい」

仏壇に飾ってあるのは体育後の、会長さんの写真だ

幼馴染みの、かなでに必死に頼み込んでやっと手に入れた

火照った顔に流れる汗をタオルで脱ぐっている会長さん

ハアハアハア……

タオル……ハアハアハア

おっと危ない！

何と言うことだ！！

この世で最も神聖な礼拝中にオレは何て事を考えてるんだ！！

軽く自己嫌悪に陥る……

会長さんへ対する欲望を、抑える為に始めた礼拝を！！

それを……それを！！

欲望で汚してしまうなんて……

「会長さん……オレどうすれば……」

オレは動かない平面の会長さんに問いかける

しかし、返事が返ってくるはずもない

「もしかして、オレめっちゃ痛い子じゃね……？」

今更ながら、ふと、そんな事を思う

正直認めたく無いがそうかもしれない

「何だかなー……」

大きく溜め息をつく

「はあー……」

こんなに会長さんの事を想っていても、会長さんはオレに振り向いてくれない

きっと気にすらしていないだろう

いつまでこんな事をオレは続けるのだろうか…？

会長さんがオレに振り向くまで？

オレが会長さん以外を好きになるまで？

それとも……

会長さんに彼氏ができたら……？

そしたらオレどうなっちゃうんだろう……？

「…って！何オレは弱気になってんだ！！

会長さんはオレの嫁！！

【佐藤きなこ】はオレの嫁！！」

オレは自分自身にそう、言い聞かせる

「会長さんに彼氏ができたら？オレは何当たり前な事を考えてんだ！？」

オレは自分以外に誰も居ない部屋で叫ぶ

言い聞かせる

「会長さんの彼氏はこのオレ！！【滝本健太】ダァ！！」

決まった

超かっこよく決まった

今まで一番かっこよく決まった

「会長さんに見せたかったな」

神様

もし貴方がいるのなら

このオレの

一途な想いを

叶えて下さい。

貴方にとっては容易いでしょう？

狂い始めた日常／2（後書き）

なかなか早く更新出来ました

今回はもう一人の主人公滝本健太

のお話でした

どうでしたか！？

健太は文章にするのが難しくて頭の中の妄想道理に書けず苦勞しました

でも今回は何気にテンポ良く書けた気がします

何だかんだ言って今までに書いたお話の中で一番上手く書けたと自分では思っています

続きが気になって貰えれば嬉しいです（＊▽

アドバイスよろしくお願いしますm（| |）m

感想で励まして下さっても嬉しいです（つゝ、△、）っ

次回も早く更新したい…

佑樹の過去―かなで編―（前書き）

少し更新が遅れました。

佑樹の過去―かなで編―

俺は放課後に突然、かなでに呼び出された。

場所は中学校の体育館裏。その場所は俺達の中学、城山中学校では好きな相手に気持ちを伝える名所となっている。

場所が場所だけに緊張が隠せない。

かなでに限ってまさか、そんな事は無いとは思うが一、男子としてはやっぱり期待してしまうのは仕方が無いだろう。

そんな事を考えながら、俺は呼び出された体育館裏へ一人で向かう。
季節は秋

校庭に植えられた木々はもう見事な紅に染まっている。

と、そこに良く見馴れた、女の子を見つけた。

しかし、いつも纏っているほんわかといった感じの雰囲気では無く、どこか張り詰めた様子で俯いていた。

……ヤバイ

こんな時って何て声かければ良いんだ……？

恋愛経験0の俺には特に気のきいた言葉も思い浮かばない……。
自分で自分が情けなくなる……。

俺が一人で困っていると、かなでがこちらの気配に気が付いたのか顔をあげた。

その瞳には不安の色が揺れている。

何て言えばいいんだろうか……。

「お、おう…よっ、用ってなんだ？」

気の利いた事なんて言えなかった。「ゆーき……」
か細い、震えた声が俺の名を呼ぶ。

しかし、かなででは俺の顔は見ずにまた俯いたままだ。

「なんだ……？」

俺は緊張を隠しながら、なるべく普通を装いながら返事をする。

「ゆーきは今……」

と、そこでかなでの言葉が止まった。

かなでの小さな身体が微かに震えている。

その震えが何から来るものかは俺には理解は出来ない。

が、かなでは今俺に何か大切な事を伝えようとしているのだろう。
なら俺は……。

そこでかなでの震えが止まった。

かなで自身の中で決心が決まったのか俯いていた顔をキッとあげ、
真っ直ぐに俺をみつめる。

その瞳に不安の色はもう無い。

かなでの口がゆっくりと開かれる。

「……ゆーきは今、好きな人っているの……？」

「えっ……」

それだけ！？

ここまで引っ張っておいてそれだけ！？

ああ、もう……。

一人で期待していた自分が馬鹿みたいだ……。

「いねーよ……」

「えっ！？ いないの……？。本当にいないの！？」

「だからいないって」

俺はやんわりと否定する。

まともに答えるつもりも無い。

しかし、どこか必死な様子のかなでは俺のその返答を中々聞いてくれない。

そして、こう言い放った。

「じゃあさ。向日葵ちゃんの事はどう思ってるの？」

「っ！？」

「ほら、何その顔？ やましい事でもあるの？ 普通ね、兄妹で恋愛感情を抱いちゃ駄目なんだよ。兄妹はいつまで経っても兄妹のまま。それ以上にも、それ以下にもならないんだよ。だからゆーき。今、もし向日葵ちゃんと何か有るんなら、早々とそんな関係は【壊し】

たほうが良いと思うな。」

向日葵は笑いながら俺にそう言った。

しかし、向日葵の言った言葉は確実に、確信に触れていた。

「お前には……関係無いだろ……」

動揺を隠せず言葉に詰まる。

「関係無い？ そんな事無いよ。だってわたし達、幼馴染みだよ？もし、わたしが間違った生き方をしたら、ゆーきはどうするの？きつと正しい生き方に正そうとするよ。だってゆーきは優しいから。誰よりも、他の誰よりも！だからそのゆーきが間違った生き方をしてるんなら、わたしがそれを正すよ。誰が何て言おうと構わない。ただの押し付けだと自分でも解ってる。でもわたしはゆーき……、違う！！」

そして最後に強く、真っ直ぐに俺の目を見つめてこう言った。

「広瀬佑樹が好きだから！！」

結局……

こう言う事か……

こいつが言いたかったのは『わたしはゆーきが好き、でも妹が邪魔なの』

長ったらしいセリフを吐き、俺を正論で黙らせようとした。

だが、結局は自分のためなんだ。

かなでが、俺とくつつきたいから。

そう解ってしまうと、あとは何を言われようが話は頭に入って来なかった。

あ、まだなんか言ってる。

聞く気もないけど。

俺は一向に黙らないかなでを黙らせるためこう言った。

「俺はお前が好きじゃない。」

その時のかなでの顔と言ったら

『最高だったw』

佑樹の過去―かなで編―（後書き）

佑樹、最低ですね。

自分で書いていて、そう思います。

佑樹の過去―かなで編―2 (前書き)

更新なかなか早くできました。では

佑樹の過去―かなで編―2

「ただいまー」

「おっかえりー!!!」

家に着くとエプロン姿の向日葵が元気に出迎えてくれた。
家の中からは仄かに良い香りが漂ってくる。

「おっ今日はカレーか？」

「せいかーい!!! 凄いなんでわかったの!？」

「いや、カレーの匂いの分からない日本人なんて居ないだろ」

「いやいやいや! わたしだったら、カレーかな? それともカレーうどんかな? もしかしてカレー鍋!? じゅるり……。とか考えちゃうよ。」

自分の両肩を抱き、くねくねしながら向日葵が、嬉しそうに語る。
そんな姿を見ていると何故か俺まで嬉しくなり、自然と頬が綻ぶ。

「あ、お兄ちゃんニヤニヤしてる。何か変な事考えてる?」

「ああ、お前で変な事考えてた」

「ほえっ!？」

俺がからかってやると、向日葵は顔を真っ赤に染めて変な声をだした。

向日葵はどこか慌てた様子でわたわたしはじめた。

「えっえっ…えっと…その…お兄ちゃんも…一応…その…おっお男の子だし……。へっ…変な事考えちゃうのも分かるけど……。

そそそそうゆう事は、本人の居るところで言わない、ほほほうが良いんじゃないかな……?」

可愛らしく顔を真っ赤にしてそんな事を呟く。

「あっ、ああでもお兄ちゃんなら良いかも……。えっと……。やっ優しくしてね……?」

なななにいつてんだこいつ!？」

完全にテンパってしまっている向日葵は、おかしい事を口走り始め

た。

わたわたししている向日葵は、目をぎゅっと瞑り唇をつきだす。

「おっおい！！ささささ流石にマズいだろ！！俺達は仮にもその…

兄妹…：なんだし…：」

「でもお兄ちゃんは今兄妹なんて関係無いって言ったじゃん！！」

向日葵は高揚した顔を隠すように俯いてそんな事を言う。しかし、表情は本気その物だ。

その表情に向日葵の心裏が読めた気がして反応に困ってしまう。

「で、でもそれは、関係の事で、行為となると…話は別だ…：」
そう…。

兄妹で関係——恋人というのは世間一般では認められていない。
しかし、俺と向日葵は、兄妹ながらそんな関係を持ってしまうとい
る。

いけない事だとは分かっているから…：

俺は今の関係以上の関係を望まない。

望んではいけない。

だから、だから

「愛があれば関係無い」

向日葵が俺の思考を遮るように言葉を放つ。

「わたしは愛こそ、世界の全てだと思ふな」

大きく手を広げ、まるで演説でもするかのように。

「喧嘩とか、戦争とか、この世のどんなに醜い行為でも、結局は【

愛】が、そこに有るから起きるんだよ」

どこか遠く、世界の全てを見下ろすように、向日葵は語る。

「例えば戦争でも、行為事態は最低な事だよ。でも、戦争には『国民に良い暮らしをさせてあげたい』っていう気持ちがあるとと思うんだよね。人を幸せにするためなら手段を問わない。そう言う事を【愛】って呼ぶんじゃないかな？」

そして最後に

「まあわたしには、何も出来ないんだけどね…：」

と

その姿は寂しそうで、
とても弱くて、

孤独で、

そして、

美しかった。

「ふえ!？」

俺はそんな向日葵を抱き締める。

今の俺にはそんな事しか出来ないから。

「そんな事言うな。お前がいるから俺は頑張れる。俺がお前に救われてる。それだけじゃ、お前は満足出来ないか？」

向日葵は顔を真っ赤に染め上げる。

その瞳が揺れ一粒、滴が落ちる。

「あれ? 何で泣いてんだろ? 嬉しいのにな……。」

そんな弱い姿を俺に見せるな。

俺の横では笑っててくれ。

「向日葵……。好きだ。愛してる。」

俺は向日葵の唇に自分の唇を重ねる。

向日葵は一度、ぴくっと肩を震わせたが俺を受け止めてくれた。

「んっ」

柔らかい向日葵の唇。

向日葵をずっと感じていたかった。

「ぶはあ……。意外と苦しいんだな……」

「もお。お兄ちゃん、雰囲気ぶち壊しだよ。普通は『もうちょっただけ……』とか言うでしょ……」

俺は率直な感想を言っただけなのだが向日葵に怒られてしまった。

「まあ、そんな所も含めてお兄ちゃんの事が好きなんだけどね!!」
向日葵は俺に、笑いかける。
その笑顔は世界をも救えるような気がした。

佑樹の過去―かなで編―2（後書き）

やっぱり難しいです…。

感想、アドバイスよろしくお願いいたします

佑樹の過去―かなで編―3 (前書き)

(祝) 2000アクセス (＊、▽、＊)

佑樹の過去―かなで編―3

いつも道理の朝のはずが、今日は少し違っていた。
起きると隣で向日葵が眠っているのだ。

その可愛らしい寝顔を見ていると無性に頭をなでなでしたくなる。
なでなでなで

「もう何で…？何で、なでなでするの？」
しまった！起きてみたいだ！

「そこは、そっとキスするでしょう？」
少しムツとした顔で言い寄ってくる。

「す、すまん…」

「もお、昨日の夜はあんな事までしておいて……。忘れたなんて言
わせないよ？」

なに！？

全く身に覚えが無いんだが……。

「えっと……。わ、忘れたんだが……。俺何かしたっけ……？」

「……。えっ！？ひどい！？お兄ちゃん最低！！」

向日葵は頬を濡らし、本当に悲しそうな顔をしている。

必死に記憶の中を探るが、該当するような出来事が思い浮かばない
……。

「ええっ！？無くほどの事か！？俺、まさか……。記憶が飛ぶくら
い激しく……」

ってだとしたら危ないか！？

俺達は何度も言っているように兄妹だ。

兄妹で肉体関係は流石に不味すぎる……。

ましてや妊娠なんてしたら……。

俺は、いや、俺達は社会的に死亡だ！！

「向日葵！！産婦人科行こう！！今ならまだ薬で何とかなる！！」
向日葵は一瞬、驚いた顔をする。

しかし、直ぐにその表情は崩れ笑い始めた。

「ぷっ、ぷっ……あはははははは！！引っ掛かった！！引っ掛かった！！腕枕の事だよー！もおーお兄ちゃんのえっちいー」

「はへっ？」

状況が理解出来ない……。

えっと…要するに……。

俺は何もしてなくて。

向日葵の言ってたのは腕枕の事で。

俺は向日葵にまんまと、乗せられたって事だな。

イラッ

ここは一言、言わせて貰おうか

「お前は兄を何だと思ってんだ！？」

「兄、彼氏、愛人、婚約者」

即答だ……。

これは喜んで良いのか……？

色々問題が有ると思うが……。

「お、おう、ありがとう」

とりあえずお礼は言っておこう。でもこのままやられっぱなしなのは悔しい……。

すると向日葵のお腹が「くううー」と鳴った。

向日葵は、恥ずかしいのか顔を真っ赤にしてお腹を押さえる。

……良いこと思い付いた。

「おい、向日葵。少し太った？」

「えっ！？急になに！？」

向日葵がジト目で睨んでくる。

しかし、声は震えていた。

「俺、あんまり太ってる女の子って好きじゃないな」

そして最後に、

「向日葵には痩せてて欲しいな」

向日葵の身体がぴくりと動く。

しばらく何かを考える様な表情をして、徐に顔を上げた。

「お兄ちゃん、今日からわたし、朝ごはん要らない」

俺は驚いた顔をしておく。

「どうしたたんだ？急に？」

「わたし、朝遅刻ギリギリなんだよね。だから朝ごはん要らない」とまた向日葵のお腹が鳴る。

「！」

向日葵はまた顔を真っ赤にしてお腹を押さえる。

「違うもん！！」

何が違うんだ？

どうやらそうとう焦っているようだ。

しかし、そんな姿もまた、可愛らしい。

これ以上からかうのも可哀想なのでここら辺で勘弁してやるか。

「嘘だよ、嘘。向日葵は太ってもきつと可愛いぞ」

俺はできる限りの優しい声で、そう言ってやる。

すると向日葵はからかわれてた事に気が付いたのか、次は怒りの色に顔を染める。

「またからかったな！！」

「でも先に仕掛けてきたのは向日葵だろ？おあいこだ」

向日葵は、俺の正論に反論もできずに黙りこんだ。

「ほら学校の仕度するぞ。遅刻するとまた先生に叱られる」

「はい」

時刻は7時

俺達の 日常 が始まろうとしていた。

しかし、崩壊は初まっていた。

佑樹の過去一かなで編一3 (後書き)

早く更新出来ました。

皆さんありがとうございます。

(祝) 2000アクセスです

ε || ε || (ノ ≧ ≧ ≧ ≧) ノ

ε || ε || (ノ ≧ ≧ ≧ ≧) ノ

ε || ε || (ノ ≧ ≧ ≧ ≧) ノ

これからも応援よろしくお願いいたします (* ^ ▽ ^) / ★ * ☆ ♪

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0899x/>

俺達が狂った夏休みから

2011年12月16日07時46分発行